

第5回 JKUAT scientific technological and industrialization conferenceの報告

光環境適応研究グループ 松島 良

11月13日から11月25日の日程で小生はケニアを訪問し、ジョモケニアッタ農工大学 (JKUAT)の定期研究会議に参加して研究発表を行った。滞在中には農業試験場や農業関連施設なども訪問し研究交流や現場視察を行った。この報告文では、主に研究会議について報告する。

研究会議の会場は、JICA (独立行政法人 国際協力機構)の支援で設立された会議場、AICAD(African Institute for capacity development)で行われた。AICADはJKUATに隣接されており宿泊施設も兼ねている。小生達訪問団は会議の間ここに宿泊した。AICADは立派な施設であり、小生が当初抱いていたケニアに対するイメージを一変させた (下図)。一番大きなホールは、400人くらいの許容量があり、ここでOpening ceremonyやPlenary lectureが午前中に行われた。午後は、4つのセッションが並行して行われ、各セッションは50人くらいの許容量の部屋で行われた。会議はすべて英語で行われた。ケニアはイギリスの植民地だったため、英語はケニアの公用語の一つである。



一日目は、学長や副学長が壇上にあがり、Opening ceremonyが行われた。政治家の先生もきており、テレビ撮影も行われていた。ケニアの農業、工業(特に製造業)や貿易の近年の変化が説明され、科学技術の重要性とJKUATへの期待が強調されていた。最後に日本の3本締めならぬ、10回くらいの手拍子により会議の

開催が宣誓された。出席者は200人くらいであり、記念撮影も行われた。その後昼食をはさみ午後のセッションに突入する。このあたりから、ケニア人特有の時間にルーズな特徴が現れる (Kenyan timeというらしい)。時間通りにセッションは始まらない。1時間以上遅れて午後のセッションが始まるが、会場にはほとんど人がいない。どこにいったのだろうか？観客が6人くらいのセッションもあった。部屋には時計が無く、たまに時計がある部屋の時計も決まって止まっていた。時間に対して極めて寛大であり、日本人とは真逆の文化に驚いた。

二日目午前中に当研究所の坂本教授によるPlenary lectureが大ホールで行われた(下図)。”Potential of plant stress science for green innovation : overview”と題して日本の科学施策としてのグリーンイノベーションプロジェクトの概要やストレス研究科学拠点としての当研究所の概要が説明された。また、これまでのJKUATと岡山大学との共同研究の経緯などが説明された。また、不良環境を克服できる植物の創出の必要性やその可能性についての説明もされた。注目度は高く、100人以上の聴衆が参加しており、活発な討論が行われた。



また、二人目の plenary lecturer としてナイロビ大学の Ambuko 博士が”Success of Chinese agriculture: What lessons can Kenya learn?”という題目で発表していた。この発表では、大学や試験場で開発された新しい技術を現場 (一般農家)に効率的に普及させるための「普及技術」の重要性を強調していた。中国の Hybrid rice を成功例として引用していた。ケニアは世界で一番中国への好感度が高い国ということで、関係は極めて良好だという。ナイロビから JKUAT に続く道路や

JKUATに現在建設中の植物園も中国からの支援による物だそうだ。

二日目と三日目の午後には、日本人の先生の多くが Crop stress science for Green Innovation というセッションで発表した。小生も”Visualization of Starch Grains: A rapid observation method to isolate mutants with defects in starch grain morphology”という題名で発表した(下図)。日本からの研究者が発表しているセッションは注目度が高く、各部屋はほぼ満席の状態であった。



小生がケニアにきて一番驚いたのは、その食事のおいしさである。小生が訪問した外国の中では最もおいしい食事が提供された。「来るまではとても食事に関して心配していたが、食事がおいしくとてもうれしかった」ということを一枚のスライドを使い発表するとケニアの研究者も喜んでくれた。

三日目の午後には名古屋大学の先生達が主催された”ケニアにおける稲作振興を促進するためのシンポジウム”が開催された。ケニアでは、イネの生産量は穀類として3番目であるが、その消費量は年12%の割合で増加している。そのため、海外から米を多量に輸入している。ケニアで食べられている米は、香り米であるバスマティー (こちらではプショリと呼ぶ)がほとんどである。名古屋大学の研究者らは、ケニアで問題になっているいもち病ならびに低温による登熟障害を克服するための耐性形質をバスマティーに導入する育種を行っており、その進捗状況についての報告があった。分子レベルの基礎研究が、実際の育種に結びついている実例であり、優れた仕事だと感じた。

今回のケニア人の発表の多くは、JKUATの教員もしくは大学院の学生によるものであった。ケニアの酸性土壌に石灰や肥料を投入した場合の収量を調べた研究や果実成分中の抗酸化物質の定量といった発表があった。遺伝学や育種学、分子生物学といった研究はなく、栽培法や生化学分析などの研究が多かった。また、モデル植物やモデル作物を用いた発表はほとんど無く、聞いたことがないような植物の発表も多いため新鮮な印象を受けた。ケニア人の発表は、そのスライドに文字が大変多い。Power Pointではなく、Word?と思えるくらい文字が多い。スライドの中の文字色も特有であり、すこし離れると全く読めない場合もあった。そのため、presentationの技術に関しては、すこしの指導ですごく改善される可能性があると感じた。

文面の所々に、ケニアの人々についての難点も挙げてしまったが、ケニアの人々の何よりも良い点は、多くの事に大らかであり、底抜けに明るく、笑顔がすてきで、そして日本人にとっても親切な点である。これは、これまでの多くの先生達のケニアに対する多大な貢献の結果、日本に対するイメージが極めて良いからである。JKUATの教員にも岡山大学でPh.Dを取得した方が多い。このような関係を今後も続けていくことは次の世代の研究者の義務なのかなと感じた。

今回のケニア訪問団は、研究所から6名、岡山大学農学部から2名の教員が参加した。小生はケニアはもとよりアフリカ訪問が初めてだったため、食事や安全面に関して過剰に心配していたように思う。しかし、同行した先生方や日本において事務手続きを一手に引き受けてくださった氷見さんの努力により、極めて快適にケニア訪問を行う事ができた。研究所や農学部の先生と今回のような大人数で旅行するのは初めて経験であり、途中の移動時間ではいろいろなお話をすることが出来た。不謹慎であるが修学旅行みたいな雰囲気があり、とても楽しい旅行だった。この場を借りて皆様に心から感謝したい。また最後になったが、長期出張の間普段と別の保育園に通ったり、出張の前後での長期移動を我慢してくれた息子にも心から感謝する。

(文責 松島 良)